

先見経済 SENKEN KEIZAI

Since 1938

Oct.2010

10

15

10月15日号

先見TOP interview

一人開業の実現が 地域の暮らしを変える

全国訪問ボランティアの会キャンパス 代表

菅原由美

聞き手・山口智史

新連載

松野 豊

好評連載

井熊 均

井徳正吾

今井 澄

鎌田 慧

小松 義夫

境野 勝子

高橋 陽子

沼崎 益夫

横田 尚哉

和田 努

特集

経営とは企業環境に適応する技術である

日本がわかる 50の数字

清話会セミナー講演録

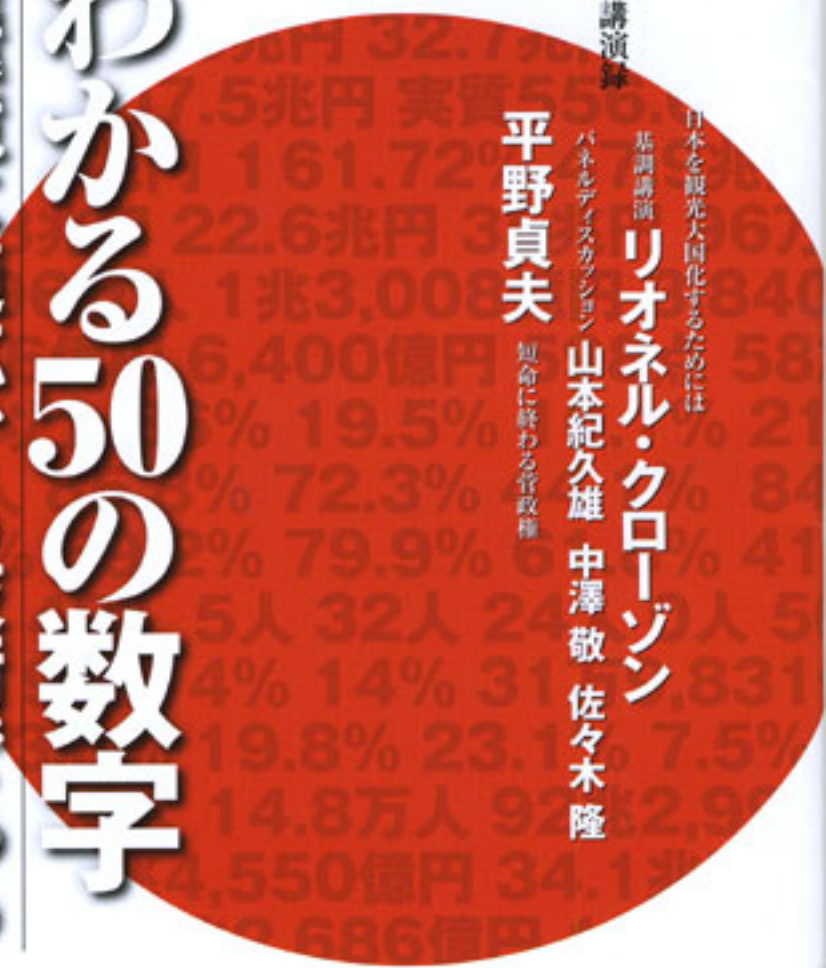
日本を観光大国化するためには

基調講演 **リオネル・クロージン**

パネルディスカッション **山本紀久雄 中澤敬 佐々木隆**

平野貞夫

運命に終わる管政権



一人開業の実現が地域の暮らしを変える

旧態依然の縦割り社会に一人て挑む看護界のジャンヌ・ダルク

聞き手▼山口哲史 株式会社フロ・アクティブ代表

「今の看護の教育には疑問が残る」と、全国訪問ボランティアアナリスの会キャンパスの菅原由美代表は言う。現場の声が反映されづらいナリス教育、一人開業に対する厳しい規制など、知られざる看護の世界の実情を聞いた。

「死ぬときは自宅で」が

キャンパス創設のきっかけ

山口 ナリス経験者が在宅ケアなどを行う全国訪問ボランティアアナリスの会キャンパスが全国に急速に広がっています。菅原さんの「ナイチンゲールになりたい」という一つの思いから始まったものですね。

菅原 もともと私は私自身が、「重病にかかったら自宅で死にたい」と考え、またそう願う人をサポートするために立ち上げた組織です。今は全国40カ所以上に支部がありますが、創設当初は全国展開なんて夢にも思いませんでした。

山口 世のなかで在宅ケアを求めようになり、それに応えるかたちで普及してきたわけですね。菅原さんの「誰かのケアを

したい」というマインドは、子どものころの両親の影響が大きかったのでしょうか。

菅原 うちの両親は職しかったんですよ。両親は家の電気をつける前まで、彼氏との電話もいつも横から切られました(笑)。ナリスになろうと思ったのは小学校高学年のころ。保健委員やガールスカウトの団長を務めていて、人の世話をすることが好きでした。両親には大学受験前に、「ナリスになるために、看護系の短大に行きたい」と話したのですが、「短大ではなく、四大に行け」と、ものすごい剣幕で叱られましたよ。

山口 テレビドラマ「寺内貫太郎一家」のような家庭だ(笑)。よくひねくれませんでしたね。

菅原 そうですね(笑)。短大





先見TOP interview

with 全国訪問ボランティアナースの会 キャンナス 代表

菅原由美

ホスト

山口哲史 (やまぐちてつし)

1961年兵庫県生まれ、関西学院大学商学部卒業後、リクルートなどを経て99年、現(株)プロ・アクティブの前身のファイールド・アクティブを設立。昔100%でできた繊維など自然でピュアなエネルギーを活用した「人を自然に輝かせる(ラディアンス)」力のある健康、美容商品の企画・販売を手掛ける。社内外ともに「ガッツさん」の愛称で親しまれている。

<http://www.pro-active.co.jp>

に入ってから、実習でがん患者に接し、「もうこの人は死ぬのを待つだけなのに、なぜ入院してはいけないならないのか。生理食塩水やモルヒネを注射しても苦しいだけだ。なぜ自宅に連れて帰れないのか」が不思議でした。

山口 末期がん患者でも、看護の資格を持つ人がいる家庭でないと、自宅に連れて帰れない現状がありますね。

菅原 結婚後に主人の母ががんになり、病院からは「もう手の施しようがない。連れて帰ってもいい」と言われました。ところが、帰宅後、義理の母は病院にいたときよりも元気になったんです。面会時間に限らず会えることで、私たちの労力も減りました。そこで、各地域にボランティアナースの会があれば、

同じような境遇の家庭の負担も減らせます。私もいつがんになるかわかりません。だからといって、病院では死にたくない。そこでつくったのがキャンナスなんです。

山口 どうやってナース経験者たちを見つけたのですか。

菅原 阪神・淡路大震災でAMDA(NPO法人アムダ)と出会い、AMDA主催の災害訓練で呼びかけたり、マスコミに連絡を取って記事を書いてもらったりして、キャンナスの思いを語る説明会を開きました。そこに六十数名のナース経験者が集まり、うち28名が登録してくれました。

山口 集まってきた人たちは、過去に看護を通して患者さんに喜ばれた経験があるから、また働きたいと思うのでしょうか。

菅原 きつとそうだと思います。ナースを辞めてから悶々とした生活を送るうちに、ボランティアならできるかもと来てくれた。最近では専門的な学問を究めようとするだけのドライな若いナースが増えました。でも、40代以上のナース経験者で、他人の世話が嫌いな人はいないでしょうね。

看護教育に大きな疑問 学問の場と現場の溝

山口 若い人の話が出ましたが、ドライでもナースの仕事は務まるものですか。

菅原 いえ、務まりません。患者と話ができない、お年寄りの体に触るのは気持ち悪いなどという人も増えていきます。また、医学部に落ちたから看護学校に来る人もいます。医学と看護は別なものなのに。

山口 心のどこかに、医者が最上位、ナースはその下といったヒエラルキーがあるのかもしれないですね。

看護教育に現場の声を 取り入れてほしい

菅原 今の看護教育は古いんです。医学部はその日に手術した

教授が学生を教え、手術以外に病棟回診や外来も行います。一方、看護の世界は、臨床を離れて数十年経った教授が教育するので、学生に現場の様子が伝わってきません。大病院の部長など現場主導の教育ができればいいのですが。

山口 溝は深そうですね。

菅原 訪問看護の世界もそうです。この分野を引っ張ってきたのは、現場で活動してきた私たち。しかし、学生を教えるのは、地域看護学という学問を学んだ保健師たちです。

山口 日本看護協会はこうした現状を、ただ見ているだけなのですか。

菅原 協会はこれまで確かに看護の世界をリードしてきました。それだけ学問や仕事一筋に生きてきた人が多いということだと思います。キャリアウーマンとしての人生を歩み、未婚の人もたくさんいます。

山口 そうなんですか。

菅原 すると実際に子どもを産んだことのある人と、産んだことのない人では、子どもが病気になるかかったときの親心にも違いが出ます。例えば「仕事をなげうってでも子どものそばに」と思う気持ちは想像もつかないでしょう。男性医師が産産の苦しみかわからないのと一緒です。

山口 リアリティを持って想